論文

立教大学観光学部紀要 第23号 2021年3月
Rikkyo University Bulletin of Studies in Tourism No.23 March 2021
pp.56–70

生活空間における紙銭とその様態
——ベトナム・台湾を事例として

A Study on the Social Space of Joss Paper in Vietnam and Taiwan

大塚直樹[*]［立教大学観光学部・兼任講師］
OTSUKA, Naoki
＊亜細亜大学国際関係学部・准教授

Abstract: The purpose of this paper is to clarify the value created by Joss paper (*shi-sen*) in social life and various aspects of its syncretism. In particular, this paper focuses on Vietnam and Taiwan, which are marginal areas of Joss paper distribution, not on mainland China where Taoism originated. The main results are as follows. Firstly, we can observe that Joss'paper is used for popular beliefs, annual events and other seasonal events, and that it is used irregularly, in other words, in everyday life. Secondly, it can be emphasized that there are different ways to offer Joss paper. For example, in the Taipei mausoleum, only gold paper (*kin-gami*), so-called dedicated to God, was used. On the other hand, in the case of Ho Chi Minh City, Joss paper in a narrow direction, gold and silver paper (*gin-gami*), and another Joss paper was sold and offered as a whole. The case of Ho Chi Minh City can be seen as an aspect of syncretism between Taoism and folk beliefs. Finally, it may be stressed that at an early stage of history, positive value was found for the fact that the paper melts with the flame and disappears, and that it is converted into smoke and rises to the heavens, which was not found in the original.

Keywords: 紙銭（Joss paper），複製技術（Mechanical reproduction），道教と民間信仰（Taoism and folk belief），ホーチミン市（Ho Chi Minh City），台北（Taipei）

I　はじめに
II　台北の廟から
　　廟と神がみ
　　模する技術とその実践
III　ホーチミン市にみられる冥具
　　ベトナムの道教と民間信仰
　　ベトナムにおける紙銭
　　店頭にみる紙銭
　　ローカルな実践と紙銭の多様性
IV　むすびにかえて

I――はじめに

東・東南アジアの一部の人びとにとって，紙銭はひろく民間信仰のなかに根ざし，その社会生活に刻み込まれている．紙銭は，その利用の歴史が古く，後漢の時代[ママ]に紙が発明された後，古代中国で神や死者を祭るために用いられていた玉や貨幣にとってかわり，魏晋時代からその風習がはじまり，階級[ママ]の上下を問わずひろく通用するようになったという（澤田，1991：188）．

中国後漢時代の蔡倫は，現在，紙製法の改良者としてその名が知られている．考古学的資料から，紙それ自体の発明は，紀元前2世紀にさかのぼる．蔡倫が歴史上に名を刻んでいる理由として，その頃に国（中央政府）が紙を一般的な書写材料に指定し，生産拡大を決定していたことがあげられている（ドゥ ビアシ，2006：18-19）．総じて新技術が発明された当初は，発明品（消費財）の希少価値が高く，利用範囲が限定されると推察しうる．上記のように，紀元前2世紀に発明された紙が蔡倫の改良をへて魏晋時代（220年～）には紙銭として利用されていた．このことから，紙銭の普及や拡散の遅速を問うことはむずかしいであろう．しかしながら，少なくとも比較的早い段階から紙銭に対する積極的な価値が見出されていたことが想定されうる（cf. 瀬川，1987：96-97）．

澤田によれば，紙銭は，黄紙に一文銭の円形をいくつも連ねて円く切れ目をつけたもの指し，楮銭ともいわれるという．その他にも名称があり，死者が冥途で使用することから，冥銭や陰銭とも名指される．また，金銀の通貨に擬して円く切り抜いた厚紙に錫箔や金箔紙を貼り付けたものは，紙錠・楮錠・冥錠と呼ばれる．さらに紙幣を擬したものを，冥鈔・冥票という（澤田，1991：187）．このことから，ひろい意味でのさまざまな紙銭が冥途で通用する模造貨幣として複製されてきたことがわかる[1]．

ベンヤミンは，複製技術時代の芸術作品を論ずるなかで，芸術作品の（技術的）複製が有する特徴として以下の点を指摘している[2]．すなわち，第1に，技術的複製が手製の複製よりもオリジナルに対して独立性をもっていること，第2に技術的複製がオリジナルの模像を，オリジナルそのものが到達できないような状況のなかに運んでゆくこと，をあげている（ベンヤミン，1995：588-589）．ここで言及される技術的複製とは，写真や映像の技術を指し示している．

前者については，たとえば，レンズの位置を調節することで，人間の目にはみえない面を強調したり，拡大やスローモーション撮影の手法によって，自然の視覚がとらえることができない映像を記録できたりする点をあげている．後者については，大聖堂の写真や野外で演奏された合唱曲のレコードなどの技術的複製によって，それぞれが個人のアトリエで受容されたり，部屋のなかで視聴されたりすることを指摘している（ベンヤミン，1995：589）．

さらにベンヤミンは，複製技術を，一般論として，以下のように定式化する．

> 複製技術は――一般論としてこう定式化できよう――複製される対象を伝統の領域から引き離す．複製技術は複製を数多く作り出すことによって，複製の対象となるものをこれまでとは違って一回限り出現させるのではなく，大量に出現させる．そして複製技術は複製に，それぞれの状況のなかにいる受け手のほうへ近づいてゆく可能性を与え，それによって，複製される対象をアクチュアルなものにする（ベンヤミン，1995：590）．

ここでいう「伝統の領域」とは，「一回限りの出現」と置き換えてもよいであろう．また，「アク

チュアルなもの（アクチュアリティ）」とは，三島によれば，ある思想が「時宜にかなっている」とか「時代をよく見ている」とか，「時代状況に立ち向かっている」などという通常の意味ではなく，活動性とか顕勢態といった，この言葉が哲学史上で持っていた古い意味を示しているという（三島，2019：3）[3]．

ベンヤミンは，あくまで写真・映像（映画）という複製技術，とくに映画にみられる複製技術と「政治の耽美主義化」および「芸術の政治化」との問題系を論じている．しかしながら，オリジナルに対する独立性，大量生産性，受け手への近接性といった着眼点は，紙銭という複製物を考察する上で示唆に富む．

再び紙銭に目を転ずると，それは道教と深く関わりをもっている．道教に基づく祭りのなかでさまざまな冥具とともに紙銭が登場する．たとえば，ベトナムにおけるong Tao（かまどの神）の送神日（陰暦12月23日）や台湾の主として南部で，3年に一度おこなわれる王醮ないし王爺醮の祭りがあげられる[4]．さらに，『道教事典』（平河出版社，1994）では，紙銭についての項目が設けられており，「冥界の通貨．紙銭を大別すると金紙と銀紙の2種類に分けられる．神仏死者なども超越的世界としては説かれず，現世と同様に金銭を必要とすると考えられた」と記載されている．

これに対して，丸山によれば，祈願において生命（命）と，貨幣（銭）というものをどのように扱うかは，道教と民間信仰との立場の違いを示す重要な指標になるという．すなわち，銭について，道教本来の祈願のなかでは，積極的な意味づけがなされていないこと，銭をささげる行為が祈願して神を感動させることで宇宙の調和をたもつといった考え方とは次元を異にすることを指摘している（丸山，2004：222-223）．

このことから，神や死者が「銭がなければ困るであろう」という発想に基づき，あの世で使える銭（紙銭）を送る行為が必ずしも道教思想と親和性をもっているわけではないことがわかる．他方で，日常空間において人びとは，さまざまな解釈のズレをともないつつ，祭りや信仰を実践していることも確かであろう．こうしたズレは，発祥地でも観察されうるであろうが，さまざまな軌跡をへて伝播した場所で顕著に現れる可能性が高い．

以上に鑑み，本稿では，中国大陸部からみて紙銭分布のマージナルなエリアであるベトナム・台湾に着目し，社会生活において紙銭が生み出している価値ならびにそのシンクレティズムの諸相を明らかにしようと試みる．

II――台北の廟から

廟と神がみ

台湾において，海外からの訪問者が紙銭を目にする機会としては，道観・祠廟の存在がまずあげられる．台湾における道教は，明朝半ばから始まった漢民族の移民とともに漸進的に浸透していった．移民の流入は，まず中国大陸南方の福建省の閩南から始まり，その後，広東省の客家が続いた．これらの地域は道教のなかでも天師教に属していたため，台湾でも天師教が主流派をなした（劉，1994：118-122）．移民した人びとが入植し，集落を形成してゆく過程で，廟はそのコミュニティの一つの基盤となっていった．劉によれば，台湾のこうした移民社会において，廟寺の発展・成長は七段階が考えられるという（劉，1994：128-132）．

道観・祠廟には，「〇〇宮」，「〇〇廟」，「〇〇台」などさまざまな呼び名が存在する．同様にそこに祀られる主祭神は媽祖や関帝など多種多様である．さらに一般的にみて主祭神以外にも多様な神が祀られている．そこで，本章では関渡宮を一事例にして台北の廟の特色ならびにその神がみに

写真1　関渡宮（台北）の全景．正面は前殿である三川殿（2017年1月撮影）．

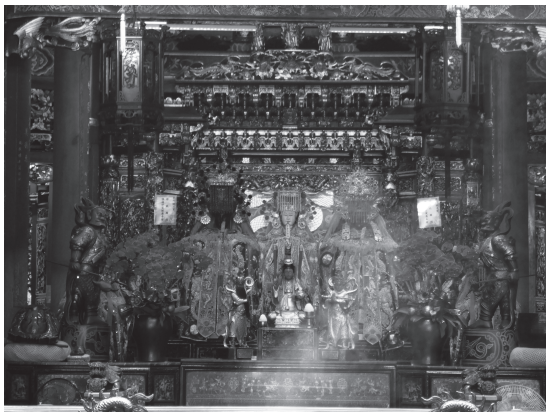

写真2　中央に関渡宮の主神である媽祖神．媽祖神に向かって右端には千里眼，左端には順風耳が安置（2019年6月撮影）．

ついて記述する[5]．

関渡宮は，台北市北投区に位置し，地下鉄（MRT）台北駅から北西に約30分の距離にある．さらに最寄りの関渡駅からは徒歩20分程度の時間を要する．関渡宮は，地元で有名な祠廟の一つに数えられている．関渡宮が発行している公式ハンドブック（陳奕愷，2016）によれば，この廟の歴史的背景が次のように記載されている[6]．関渡宮は，1712年（康熙51年）に前身となる天妃廟が創設されたことにはじまる．この廟は，主祭神として天上聖母媽祖が祀られており，台湾北部最古の媽祖廟といわれている（写真1・2）．1907年には現在の規模にまで建造物が拡大し，関渡宮と改称された．その後，財神洞などが増築されて，近年でも

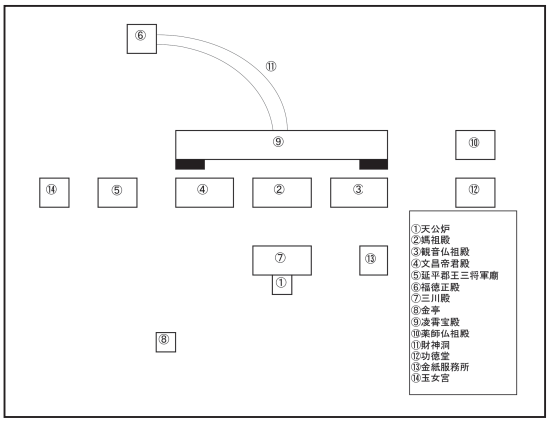

図1　関渡宮（台北）の略図．本文のなかで言及した建造物のみを示した．図中の黒塗り部分は財神洞への入り口を示す．

三川殿の修復工事などがおこなわれている（図1参照）．

関渡宮には，主祭神の媽祖のほか，多様な神がみが祀られている．公式ハンドブックに記載された参拝経路に位置する神をあげると，観音仏祖，文昌帝君，延平郡王，福徳正神となる．主祭神の媽祖は海上活動の守護神から次第に一般的な守護神に据えられるようになった神であり，観音仏祖すなわち観世音菩薩は大乗仏教でとくに崇拝される菩薩である．文昌帝君は文章，学業，科挙受験者の守り神，延平郡王は鄭成功を指し，福徳正神は生活空間としての土地を見守る土地神である（cf. 窪，1996；野口・田中編，2004）．この他にも玉皇上帝や三官大帝，遙池金母など多様な神がみが祀られている．

模する技術とその実践

ここでは紙銭のもつ意義を考察するため，廟をとりまく具体例を提示する．関渡宮では，廟内に入って右側に参拝・焼香の順序が図示されている．まず前殿である三川殿からせり出して位置する天公炉（①），さらに正殿の媽祖殿（②），観音仏祖殿（③），文昌帝君殿（④）の順に合計4カ所である．前述した2016年発行の公式パンフレットの記述，ならびに少なくとも2017年11月の調査時点では，

正殿以外に延平郡王三将軍廟(⑤)，福徳正殿も参拝経路として廟内の案内図に示されていた．したがって，それ以降に2019年6月現在の4箇所になったと考えられる．案内図の変化にともなって，以前6本セットであった線香が現在4本セットになっている．また，これに合わせて，案内図の名称が「参拝順序」から「正殿の参拝順序」と変更されていた．ただし，延平郡王三将軍廟，福徳正殿ともに線香ならびに香炉があり，焼香できるようになっている．

以下では，2019年6月に調査に基づき，現地の人びとの具体的な参拝の状況を詳述する．調査では，5組の参拝の様態を考現学的に観察したが，紙幅の都合上，3組のみを記す．なお，事例中の丸数字は，上記の参拝箇所の(　)内に一致する(あわせて図1も参照)．

【事例1】単身で参拝にきていた中年男性．

カメラを含めて手荷物をもたない軽装であった．

お布施をした後，金紙と金紙服務所に同時に置かれている菓子を手に取り，媽祖殿前に置かれた供物台へ向かう(写真3)．金紙および菓子を①と②に向かって掲げてそれぞれ一礼する．両者を供物台に置いた後，金紙服務所に戻り，線香のセットを取り，火をつける．①②③④の順番に参拝する．しかる後，媽祖殿正面の供物台下に安置された虎爺公に屈みこんで参拝する．⑤に向かい，参拝をするも焼香はしなかった．

次に正殿裏，左側の階段を利用して，凌霄宝殿5階(主殿に三官大帝ならびに南斗星君および北斗星君が祀られている)に向かい参拝し，その後，正殿裏の右手の階段をくだり，隣の薬師仏祖殿で参拝し，正殿に戻った．いずれも参拝のみで焼香をしていない．正殿に戻ると，①に一礼して，自分が置いた金紙を持ち，②に一礼をした後，建物を出て右手の金亭(金炉)で金紙を燃やす(写真4)．金紙が完全に燃焼するまで確認していた．建物右手から入り，③に一礼し，次に②に一礼し，菓子をとり，載せていた皿を金紙服務所に返却し，再び②に一礼して帰路についた．参拝時間は30分程度であった．

写真3　中央の供物台の上に果物や菓子などとともに金紙が供えられている(2019年6月撮影)．

写真4　金亭で金紙を燃やす参拝客．写真の人物は事例1のそれと異なる(2019年6月撮影)．

【事例2】母親と子ども（男）の親子とおぼしき2名.

母親はハンドバッグのみの軽装，子どもは供物（果物）を持参していた.

まず持参した果物を供物台に置いて，お布施をした後，金紙と菓子1セットを持ち，果物の近くに置く．廟に常設されている供物皿は使用しなかった．それぞれが線香に火をつけた後，（左右を見回すような感じで）母親が金紙服務所で何かを聞いていた．直前・直後の動きなどから参拝順を聞いていたと推察される．①②③④の順に参拝していた．参拝自体は手短に済ませていた．母親は何かの紙を持って参拝していた．参拝後，子どもが紙を受け取り，再び②で参拝し，香炉の煙の上で紙を何度か回すような仕草をした．③と④でも同じことをおこなった．④の前のクリアボックスにこの用紙を入れた．果物，金紙，および菓子をすべて持って本来の出口とは逆の右側から廟を出て，母親が金紙を金亭で燃やし帰路についた．廟での滞在時間は15分程度であった.

参拝の有り様を観察した後，クリアボックスを確認したところ，ヨコ面に「祝賀　考生金傍題名」の文字が記載されていた．また用紙は大学入試の科目通知書であった．通知書によると7月に試験が実施されるようであった.

【事例3】母親，息子，息子の子どもの三世代の親子とおぼしき3名.

母親と息子はショルダーバッグ各一つ，および孫（息子の子ども）用らしきリュックサックが一つであった．息子がお布施をして，金紙と菓子を供物台に置く（1セットのみ）．その間に母親が2セットの線香に火をつける．①では息子が先，その後，母親という順で，ベビーカーの幼児を交互に見ていた．続いて，②③④順に，息子が先に参拝した後，母親が交代し，参拝した．関渡宮での参拝の後，同廟に隣接する玉女宮（主祭神は玉女娘娘）へ3人で移動し，息子のみが線香を持ち参拝する．しかる後，玉女宮外にある財神殿の参拝のため，一度玉女宮を出た後，廟内に戻る．参拝後，関渡宮の正殿に戻り，金紙と菓子を持ち，皿を返して，左から建物を出た息子が金炉で金紙を燃やす．母親と孫は三川殿で待っていた．息子は一度そこへ戻り，帰路につく.

これらの事例の共通点として，最後に金紙を金亭にて燃やすことが確認できる．言い換えれば，廟参拝において，金紙を神にささげる行為が根本規範として認識されていることがうかがい知れる．なお，関渡宮では，金紙のみが置かれ，銀紙が視認できなかった．台北中心部に位置する青山宮も同様に金紙のみが置かれていた．台北市内の複数の廟を確認した範囲で，銀紙が置かれていたのは台湾省城隍廟のみであった．また，話がやや脇道にそれるが，2019年6月16日に青山宮に向かったところ，折しも当該施設に蔡英文総統が訪問していた．この訪問は選挙活動の一環とも推察される.[7] ここから，台湾において，道観・祠廟が社会生活に深く根ざしていることが垣間見られた.

III――ホーチミン市にみられる冥具

ベトナムの道教と民間信仰

ベトナムにおける道教は，大西によれば，中国の支配下にあった北属期に現在のベトナム北部地域に道観がつくられたことにはじまるとされる．さらに938年の独立後，とくに陳朝期の13世紀ごろには福建から来訪した道士との交流がみられ，ベトナム道教に大きな影響をあたえたという．言

い換えれば，ベトナムでは，唐・宗時代の道教が重層的に受容されてきた．さらに13世紀頃には，それまでの中国の玄元帝君にかわって土着の土地神が主神となり，信仰形態に変化が生じていたという（大西，2001：111-121）．また，『ベトナム語大辞典』（*Dai tu dien Tieng Viet*, Nxb Van Hoa-Thong Tin, 1999）によれば，道教（Dao Giao）は，「2世紀に中国で広まった老子思想に起源する宗教」と記載されている[8]．

周知のようにベトナム社会は「南進」によって漸進的に現在のベトナム中南部に領域を拡大してきた．こうした歴史的プロセスは，上記にみたベトナム道教の時系列の変化だけでなく移動による空間的変化，言い換えれば，社会空間的な差異をもたらしてきた．実際，道教を含めて広く民間信仰に目を向けると，ベトナム各地でさまざまな地域差がみられる．たとえば，前述した陰暦12月23日のong Tao（かまどの神）の送神日における供物には，地域間での相違が存在する[9]．以下では，こうしたベトナムの冥器／冥具，とくに紙製の祭祀用品について概観し，ホーチミン市における具体例を記述する[10]．

ベトナムにおける紙銭

ハノイ近郊の紙銭生産地にて聞き取り調査を実施した芹澤は，ベトナムにおける紙銭生産の特徴を以下のように言及している．すなわち，この産地では，giay vang maと呼ばれる銭型を黄色い紙に刻印した紙銭（沖縄のウチガミに類似）を生産し，これをgiay tienと呼んでいるという．giay vang maは「冥器（明器）としての金の紙」，giay tienは「銭の紙」の意味をなす．そして，銭型を刻印した紙銭が「紙銭のなかの紙銭」であり，少なくともこの産地ではもっとも古い形であると指摘している（芹澤，2013：140-141）．

近現代史の視点からみると，ベトナムにおける紙銭（冥具）生産は，社会主義的な政策が実施されて以後，改革開放政策（ドイモイ）が開始される以前には「迷信のたぐい」として党・政府から一時的に禁止されていた（川上，2001：62-63）．しかし，川上によれば，ベトナムの北部の事例では当該期にも密かに冥具が生産され，闇市で販売されていたという（川上，2001：66-69）．

これに対して，大西によれば，1975年1月15日にハノイにおいて，「ベトナム労働党中央委員会指示214号」が出され，「迷信異端排除に関して」という条項のなかで，紙製の衣服や靴などの模型，模造紙幣を売買すること（mua ban vang ma）が禁止されたとされる（大西，1995：218-219）[11]．川上（2001）の調査地では，土地改革・合作社の設立の時代から冥具生産が禁止されていたとのことであるから，大西（1995）の指摘する禁止条項の指示は，蔓延する闇市での流通を再規制した可能性が高い（cf. 大泉，2017：17-18）．現実的にみて，紙銭が葬送儀礼と結びつくことから，死者が増加した可能性が高いベトナム戦争（抗米救国戦争）期には紙銭に対する需要が高かったことが容易に想像される．

また，中国大陸や台湾の主として漢民族の間では，金紙が神に対して供えられ，銀紙が祖先に対して供えられるという形で使い分けがされるという（芹澤，2013：137）．たとえば，前出の『道教事典』では，「金紙は，…祠廟寺に参詣し，願い事をする際に焚き，神仏祖師に供える」，「銀紙は，葬儀または祖先・無縁亡者・邪霊等の葬礼に焼かれ［る］」（［　］内は引用者）と定義される．この点は，前述の台湾の廟における参拝実践とほぼ重なり合う．

店頭にみる紙銭

ここでは，ホーチミン市にあるビンタイ市場において売られていた紙銭を詳述する．ビンタイ市場は，ホーチミン市中心部，現在ではバックパッカーが集う空間としても有名になったファムグー

ラオ通りに立地している．この店舗は，市場の建物が外延的に拡大した周縁部に位置し，木造の屋台で露店のような形態になっている．

2016年および2017年に断続的に実施した聞き取り調査の範囲において，こうした祭祀用品は，tien giay bac，tien vang bacないしtien bacと呼ばれていた．三つの名称に共通するbacは，第一義的に元素の銀を意味することから，ベトナム語からの直訳ではtien giay bacが「銀紙の銭」となる．ただし，『ベトナム語大辞典』によれば，bacの4番目の意味に金銭（tien）とあることから，広く金（カネ）と捉えるほうが順道かもしれない．また，聞き取り調査のなかで，あるインフォーマントは，紙銭のことをtien am phuと表現した．am phuは死者の国・世界といった意味を指し示す．さらに同じインフォーマントは，「［紙銭を供えることは］中国の習慣を踏襲した行為」と説明してくれた．

先の用品店の女性店主は，紙銭をベトナム語でtien bacと言い表した．店頭にはさまざまな紙銭が陳列されていた．実際にそのなかでセット販売されていた3種類を購入した．全部で13,000ドンであった（それぞれ3,000ドン，5,000ドン，5,000ドン）．店主によれば，「各セットは店で販売しているすべての紙銭を含んでいる」とのことであった．

ここでは3,000ドンのセットの内訳を確認してみたい[12]．このセットには，7種類の紙銭が含まれていた（写真5〜11）．銭型が印字された黄色・白色の紙銭が各5枚，金色と銀色がそれぞれ塗られ

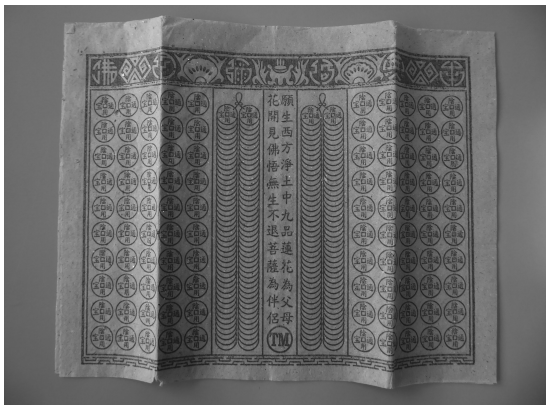

写真5　3,000ドンのセットの内訳1：銭型を刻印した金（黄）紙．タテ21.5cm ヨコ27cm.

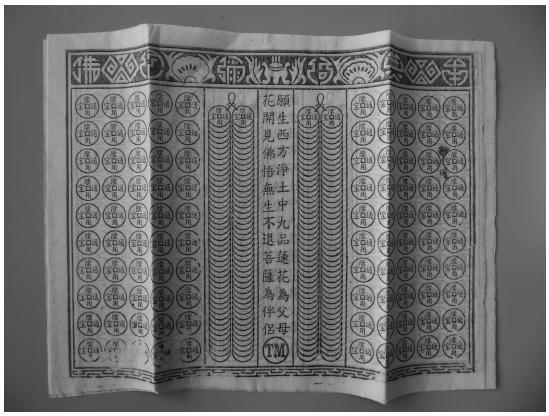

写真6　3,000ドンのセットの内訳2：銭型を刻印した白色（銀）紙．タテ21.5cm ヨコ27cm.

写真7　3,000ドンのセットの内訳3：金色の紙銭．タテ9.5cm ヨコ13.5cm.

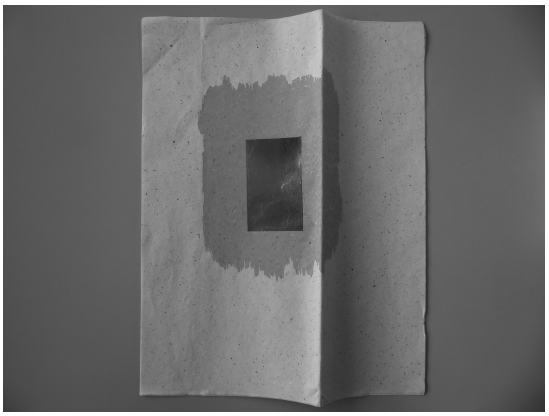

写真8　3,000ドンのセットの内訳4：わら半紙に金色を塗った紙銭．タテ23cm ヨコ18cm.

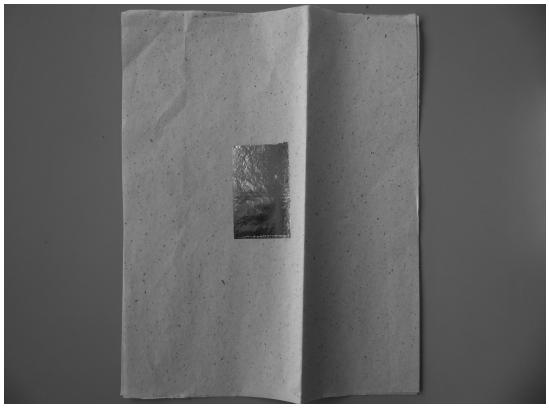

写真9　3,000ドンのセットの内訳5：わら半紙に銀色を塗った紙銭．タテ23cm ヨコ18cm.

写真10　3,000ドンのセットの内訳6：アメリカドルを擬した紙銭．タテ6.3cm ヨコ15cm.

写真11　3,000ドンのセットの内訳7：ベトナムドンを擬したと想定される紙銭．タテ5.9cm ヨコ14.3cm.

たわら半紙が各3枚，「財神」と明記された金色の厚紙，さらにアメリカドル（100ドル）を擬した紙幣とベトナムドン（1,000,000ドン）を擬したと想定される紙幣が各3枚である．金色の厚紙には「地府通用」と漢字で書かれており，ベトナムドン紙幣には「地府通用」とともにベトナム語でNgan Hang Dia Phuと刻印されている．Ngan Hang Dia Phuは「地府銀行」の意である．地府，つまりあの世の銀行で発行・通用する紙幣ということである．金色の厚紙は二つ折りできるようになっており，金の延べ棒を模しているようにも見て取れる．

この事例から興味深いことが3点ある．第1に，金紙とそれ以外の紙幣が区別されず，セットで販売されている点である．これは神と死者・祖先とに対する祭祀に明確な境界線が設定されていない可能性を示唆している．2016年および2017年の現地調査では，セットの内訳における個別の紙銭の名称を確認できなかった．したがって，総称としてtien giay bacまたはtien bacの概念が適用されるものの，今後聞き取りを進める過程で総称とは別の名称が判明する可能性もありうる．ただ，現時点では後述のように現地の人びとの実践からみると，金紙とそれ以外の擬した紙幣とを明確に区別していることを想定しにくい．

さらに加えれば，民間信仰を解説したVietnam Netの記事では，こうした紙銭全般に対してvang maという用語が使われていた（Vietnam Net, 26/08/2015）．『ベトナム語大辞典』によれば，vang maは「vangとma［vangは，金・金製の意，maは，死者に対して燃やして供えるため，実物・現物に準じて裁断された紙製品の意］，死者に対して燃やすために用いられる紙を裁断したもの」と説明される．同記事には，沖縄のウチガミに似た紙銭ではなく，黄色い（ないし金色の）紙銭の写真が掲載されており，そのキャプションにvang maが使用されている．

同様にVnExpress電子版において紙銭の販売額について紹介する記事でも銭型を刻印した黄色の紙銭giay vang maと他の黄色の紙銭を明確に区別せずに記載している（VnExpress, 01/08/2016）．前

述のように，芹澤によれば，生産地におけるgiay vang maは「冥器としての金の紙」を指しており，銭型を黄色い紙に刻印した紙銭であるという．こうした宗教実践の差異には，紙銭の生産者と消費者との間に認識のズレが存在する可能性や，先の金紙と銀紙を使い分けがみられないことと同じ様に民間信仰における混交化，すなわちシンクレティズムがみられるともとらえうる．

第2に，このセットには銀紙が含まれている点があげられる．芹澤が調査したハノイ近郊の事例では，フランス植民地時代には存在した銀紙（cf. 水谷，1943：225）がみられず，金紙（ないし香港のような金銀紙）のみが流通していることが指摘されている（芹澤，2013：144-146）．芹澤による現地調査は，2010年から2012年にかけておこなわれた．したがって，ホーチミン市において銀紙が個別に存在する現象が今回の調査との時間的差異なのか，または，ベトナム南・北という空間的相違なのか，現時点では詳らかではない．しかしながら，前述したong Taoへの供物の例から類推すると，ベトナムにみる地域間の差異を想定しうる[13]．

第3に，アメリカドル紙幣が額面および図柄が実社会で流通するそれに近似・類似している，言い換えれば複製されているのに対して，ベトナムドン紙幣については，似て非なるものなっていることがあげられる．2018年現在ベトナムにおける最も高額の紙幣は500,000ドンであり，故ホーチミンの肖像が描かれている．こうした相違の背景には，ベトナムにおいて実社会に流通している紙幣のコピーを禁止する方針が打ち出されたことが関係しているとも類推できる（Viet Nam News, 09/03/2011）．しかしながら，紙幣のコピー禁止のみが理由であるとすれば，アメリカドルを複製した紙銭の存在を説明しきれない．すべてのベトナムドン紙幣には，故ホーチミンが刻印されている．このことから，あの世の金銭とはいえ「建国の父」を燃やすという行為に対して何らかの社会的・政治的な抑止作用もあわせて働いており，結果として，ベトナムドンの紙銭が似て非なるものになっているととらえてもよいであろう．

ローカルな実践と紙銭の多様性

聞き取り調査によれば，ベトナム南部では陰暦2日と16日に供物をささげる習慣があるという．その他にも前述のようにong Taoの送神日や，陰暦の正月や親族の命日，葬式などもでも紙銭を供え，焚く／燃やすことがある．ベトナムではグレゴリオ暦と陰暦とが併用されている．ホテルや行政機関など公的な場面ではグレゴリオ暦を使用する場合が多い．しかし，正月については，グレゴリオ暦1月1日のみが祝日になっており，陰暦の正月が盛大に祝われる．現地では，ベトナム語の正月を意味するテト（語義的にみるとtetは「節」の意．Tet Nguyen Danが元旦節）といった場合には通常陰暦の正月を指す．

日常生活のなかでベトナムの人たちは，陰暦の正月を重要視している．年齢を重ねる行為も陰暦が基準になっている．つまり，誕生日ではなく毎年テトを過ぎると年齢を重ねることになる．また，多くの企業はテト前に賞与を出す[14]．さらに日常生活のなかで現地の人びとの会話を聞いていると，日付を発話した後にTayというベトナム語をつけていることに気がつく．Tayは直訳では西を意味し，広く西洋というニュアンスでも理解されうる．したがって，日にちの後ろにTayをつける言動は「西暦の〇日」ということを意味する．裏を返すと，日付の後に何もつけない場合には，必然的に陰暦を指していることになろう．同じ思考様式で，グレゴリオ暦に基づく正月がTet Tayと呼ばれる．ここにも陰暦に依拠した日常生活が垣間見られる．

再び，2016年12月末の調査に目を転ずると，陰暦12月2日（グレゴリオ暦12月30日）に遭遇した．事前に文献等で確認した範囲で，ベトナムでは陰

写真12　供物．紙幣を擬した紙銭のすぐ下に金紙に供えられている（2016年12月撮影）．

写真13　供物．写真の左端にみえるのは立体の紙製模型で金塊を擬していると考えられる（2016年12月撮影）．

暦1日および15日に紙銭を燃やす習慣があると指摘されていた．確かにホーチミン市では，陰暦1日も含め，数日前から街中で紙銭を燃やす行為が散見されたが，2日に最も多くの供物を確認できた．聞き取りによれば，主としてベトナム北部では1日および15日に祭祀をおこなうとのことであった．また中部では15日にのみ供物を捧げるとの説明であった．

写真14　供物．アメリカドルを擬した紙銭が供えられている（2016年12月撮影）．

写真12～14は，2016年12月の調査で撮影したものである．写真12をみると，金紙と紙幣を模した紙銭が同時に供えられていることがわかる．写真13の金色をした立体模型は金塊と考えられる．今回観察した範囲では，立体型の冥器はこのケースを含め2例しか確認できなかった．立体模型が少ない理由として，前述のように，社会主義的な政策が実施される過程で，一時的に冥具生産が禁止され，立体形の冥具が淘汰された結果（川上，2001：67-68），相対的に，かつかりに非合法であっても生産しやすい紙製の冥具が残されてきたと考えられる．

写真14については，供え物をしていたインフォーマントが「故人nguoi matに対する供物である」と教えてくれた．写真にみられるコーヒーや煙草は故人の好んだ嗜好品と考えられる．また，別のケースでは，実際に自宅前でアメリカドルを擬した紙銭を燃やす場面に逢着した．その場で話を聞いてみると，やはり「故人に対する供物」とのことであった．

IV――むすびにかえて

本論文は，生活空間において紙銭が生み出している価値ならびにそのシンクレティズムの諸相を明らかにすることを目的とした．まず，指摘しう

る点として，紙銭が民間信仰・年中行事ほかの季節性・イベント性をもって利用される場合と，非定期の，言い換えれば日常的に用いられる場合が観察されることがあげられる．

たとえば，前者では，ホーチミン市の事例や台湾の廟における事例2および事例3があげられる．廟参拝の事例2は，合格祈願のための訪問と考えられる．受験通知書を持参し，学問の神である文昌帝君殿前の供物台に設置されたボックスにそれを投函しただけでなく，参拝時間が相対的に短かったことは，廟を訪れた目的が明確な証左であろう．もちろん祈願成就（合格）を報告するための参拝の可能性も考えられる．台湾では大学入試制度が多様化しており，5月にも合格発表がおこなわれる（日暮・石井，2015：26-29）．しかしながら，本事例は，不慣れな雰囲気で参拝しており，初訪問である可能性が高いこと，科目通知書を持参していたことなどから前者であろう．どちらにしても特定の目的をもった廟訪問であることを確認できる．また，台北の事例3は，幼児の無病息災を目的に訪問したと想定される．理由として関渡宮の西側に隣接する玉女宮でも参拝をしていたことがあげられる．玉女宮の主神は，娘娘神（女神）であり，職能が子どもに関することや治病に関することが多い．

これに対して，台北の廟における事例1は後者に位置づけられよう．軽装であったのと同時に非常に慣れた様相で参拝をしていた．もちろん定期的な訪問といっても，参拝の目的があることが推察される．この事例では，天公炉および媽祖殿では，かなり長い時間をかけて参拝していた．他方で，観音仏祖殿や文昌帝君殿では参拝を相対的に簡略化していた．また，媽祖殿正面の供物台下に安置された虎爺公でも参拝している．虎爺公は，廟の守り神であり，また土地公などの属神でもある．供物台の下ということもあり，定期的に廟を訪問しているか，もしくは事前の知識がない限り，見つけにくい場所に祀られている．このことから，この事例では，正殿の主祭神の媽祖と虎爺公への参拝を主たる目的としていたと考えられる．

この他にも，前述のように，関渡宮にはさまざまな神がみが祀られている．一人で訪問していたある中年男性は，1時間近くを費やし，媽祖が主祭神として祀られた正殿以外にも，福徳正殿，財神洞，凌霄宝殿5階，薬師仏祖，功徳堂などをめぐってそれぞれで参拝していた．また，三世代の親子とおぼしきグループの事例では，めいめいが順路にとらわれず自由に参拝し，小さな子どもを廟内で遊ばせているような，いわばレジャー化したような参拝もみられた．いずれの場合であっても必ず最後に香炉で金紙を燃やしていた．このような非定期ないし日常的に紙銭が用いられる場面は，廟といった特定の聖なる空間において立ち現れる．

次に，紙銭の多様な供え方がみられることを指摘できる．ここまで紙銭を，金紙・銀紙以外，明確に区別をせずに言及してきたが，前述の澤田の定義にしたがえば，黄紙に一文銭の円形をいくつも連ねて円く切れ目をつけた狭義の紙銭，紙錠などと呼ばれる金紙・銀紙，および紙幣を擬した冥鈔に分けられる．例外がみられるものの，台北の廟では神に対して献げるとされている金紙が用いられていた[15]．これに対して，ホーチミン市の事例では，狭義の紙銭，金紙・銀紙および冥鈔がセット販売され，供えられていた．このホーチミン市の事例は，道教思想と民間信仰とのシンクレティズムの一側面としてとらえうる．

本論の冒頭で述べたように，ベンヤミンは，複製技術時代の芸術作品を論ずるなかで，技術的な複製品のオリジナルに対する独立性，大量生産性，受け手への近接性を示唆していた．この切り口を，紙銭分析に敷衍させると，まず印刷技術の発展にともなった紙銭の大量生産・廉価販売（近接性）がみられたことは確かであろう．しかしながら，こ

の説明原理は，技術的複製が容易になる以前から，オリジナルの代替として紙銭が供えられていたことを詳らかにできない．ここで，ベンヤミンの論点からは時代的にみて逸脱することを前提として，オリジナルに対する独立性という視点を取り込むと，紙のもつひとつの性質である消滅可能性が浮かび上がる．すなわち，焚く／燃焼させる行為によって消滅する特性である．言い換えると，紙銭は，火と融和して煙となり，天にのぼる．

『道教事典』では，先の紙銭の事項で「そのとき生じる煙は天に上り，金紙は神仏祖師の財産になると信ぜられている」と説明されている．したがって，歴史的にみて早い段階で，オリジナルにはない，紙のもつ消滅性ならびに煙に変換され，天界へ上昇してゆく価値が積極的に見出されていたとも想起される．

具体的に考察すれば，台湾の廟では，任意のお布施をすれば，金紙を供えることができ，ホーチミン市の事例では，紙銭を廉価で入手することができる．このことは，聖なる対象や祖先への貴重な／不可欠な供え物が相対的にたやすく手に入れられることを表す．言い換えれば，紙銭という模する技術は，実社会と冥界とを結びつけ，当該社会で暮らすより多くの人びとに多様な安息を与える媒体となり，いわば安息の大衆化に貢献しているといえよう．しかしながら，紙銭が古くから供えられていた実践のなかに，紙銭がもつ消滅可能性という価値観が内在していたとみなすのであれば，通常のエコノミーとは別の論理が働いている可能性を示唆している[16]．したがって，複製技術によってもたらされた供物としての紙銭は，財貨の象徴としてだけではなく，消滅可能性という記号としての働きをも有しているととらえうる．

最後に，試論ではあるものの，模する技術に依拠した複製品は，オリジナルとの比較から価値と形態との類似性／差異性というベクトルから分類できるかもしれない．すなわち，複製品の，オリジナルのもつ価値との類似性／差異性ならびにオリジナルの形態からみた類似性／差異性である．今後の現地調査において，この視点から，ひろい意味での紙銭のマトリクスの考察を進めてゆきたい．

［付記］

本稿の骨子は，2020年9月5日におこなわれた科研費（文部科学省科学研究費補助金　基盤研究（B）「「模する」技術の発展と伝統的習俗の変容についての学際的研究」課題番号19H01395，研究代表者：野口直人　東海大学工学部助教）の研究会（オンライン開催）にて「紙銭の社会空間」というタイトルで発表した．当日の参加者の有益な質問・コメントに深く感謝したい．

注

1 以下，本稿では，とくに限定して断らない限り，冥界を対象として用いられる紙製の複製貨幣ないしそれに準ずる複製品を総称して紙銭と呼ぶ．

2 ベンヤミンの当該論考に関する解題・批評は枚挙にいとまがない．さしあたり以下をあげておく（多木，2000；三島，2019：452-474）．

3 なお，多木は，ベンヤミンの触覚的な知覚に注目している（多木，2000：116-131；多木，2003：45-58）．あわせて，多木は，ベンヤミンによるアロイス・リーグルへの言及も重要視している（多木，2000：64-72；多木，2003：31）．

4 ベトナムのong Tao（かまどの神）の祭りについては，大西（2002），王醮ないし王爺醮の祭りについては，松本（2004）を参照のこと．また，邢（2020）は，展示学の視点から王爺祭を分析している．

5 本章の現地調査の一部は，すでに大塚（2020）で報告している．調査は，2017年1月2日～7日および11月10日～13日，2019年6月13日～17日にかけておこなった．

6 以下，断りがない限り，関渡宮の歴史に関する記述は本ハンドブックに依拠する．

7 たとえば，2020年1月の総統選挙を紹介する新聞記事において，選挙戦における廟訪問の意義が指摘されている（『毎日新聞』2020年1月7日付）．

8 同辞典によれば，Dao Giaoの2番目の意味として，「宗教と同じ」とされている．これはベトナムにおいて道教が宗教一般を指し示すということではなく，Dao（漢越語で「道」）がひろく宗教を意味していることに由来すると推察される．

9 たとえば，大西は，ベトナム語文献読解に基づき，この祭祀における供物の地域差を解説している（大西，2002：96-97）．具体的には，天界へ赴くためのong Taoの乗り物が北部では生きた鯉であるのに対して，中南部では紙製の馬へと変化する．なお，Son Namによれば，南部では，この祭祀でco bay ngua chay（直訳すれば「鷺が飛び馬が走る」）と呼ばれるvang maが供えられるという（Son Nam, 2003: 276）．また，VnExpress電子版では，「サイゴンの人びとはong Taoに鯉を供えない」というタイトルの記事が掲載され，co bay ngua chayのvang maがong Taoに供えられることが紹介されている（VnExpress, 16/01/2020）．

10 本章の現地調査は大塚（2018）で報告した．調査は，2016年12月～2017年1月，2017年8月の2回，約2週間にわたりおこなった．

11 大泉（2017）は，こうした「迷信異端」の排除を含めて，ベトナム民主共和国時代の新生活様式政策について詳述している．

12 2017年現在で，ひとつかみの赤唐辛子（生）が2,000～3,000ドン程度である．また，歩道にオートバイを駐輪した場合（路上駐車），駐輪スペースでオートバイを管理している保安員に支払う金額（いわゆる駐輪代）が，立地にも左右されるものの，平均して5,000ドンである．

13 なお，今回購入した別のセットのうち，一つには（1枚の紙を左右に分けて，それぞれに金色と銀色を塗った）金銀紙のみが含まれており，もう一つには金銀紙ならびに金紙・銀紙がそれぞれ封入されていた．

14 この時期の賞与は，13か月目の給与ないしお年玉と解釈される場合もある．

15 前述のように，台湾省城隍廟の服務所には金紙だけでなく銀紙が置かれていた．しかしながら，同廟を複数回訪問したものの，参拝者が銀紙を供えている場面には遭遇しなかった．なお，台北市内の冥具を扱う店舗では，台湾元・人民元・アメリカドル・ユーロなどを模した紙銭が販売されていた．

16 ここでは贈与と交換との問題系を視野に入れる必要があろう．これについての考察は稿を改めて論じたい．この点を，湯浅（2020）が簡潔に整理している．とくに3・4章を参照のこと．また，視点がやや異なるものの，床呂・河合（2011）の議論も参考になろう．

文献

- 大泉さやか（2017）「ベトナム民主共和国の新生活様式政策における規約の策定指導」『東南アジア――歴史と文化』46，5-26ページ．
- 大塚直樹（2018）「ベトナム冥器／冥具考事始め」『榧――国際関係・多文化フォトジャーナル』vol. 5，4-11ページ．
- 大塚直樹（2020）「模する技術の社会空間――台北の道観・祠廟にみる実践」『榧――国際関係・多文化フォトジャーナル』vol. 7，22-29ページ．
- 大西和彦（1995）「最新・ベトナム「信仰」事情」石井慎二編『ベトナム〈沸騰〉読本』（別冊宝島WT①）宝島社，218-224ページ．
- 大西和彦（2001）「ベトナムの道観・道士と唐宋道教」遊佐昇・野崎充彦・増尾伸一郎編『アジア諸地域と道教』講座道教　第6巻，雄山閣，2001年，110-127ページ．
- 大西和彦（2002）「ベトナムの正月行事と民間信仰」『アジア遊学』46，96-104ページ．
- 川上崇（2001）「ベトナム社会主義革命のなかの手工芸村――紅河デルタにおける木版印刷業の歴史的展開」『ベトナムの社会と文化』3，49-79ページ．
- 窪徳忠（1996）『道教の神々』講談社学術文庫．
- 邢継萱（2020）「台湾王爺祭とその展示考察」『東アジア文化交渉研究』Vol. 13，213-224ページ．
- 澤田瑞穂（1991）『地獄変――中国の冥界説』平河出版社（修訂版）．
- 瀬川昌久（1987）「あの世の財貨――香港の紙製祭祀用品」『季刊民族学』39，94-101ページ．
- 芹澤知広（2013）「ベトナム・ハノイの紙銭――比較研究の試み」『国際常民文化研究叢書』3，133-149ページ．
- 多木浩二（2000）『ベンヤミン「複製技術時代の芸術作品」精読』岩波現代文庫．
- 多木浩二（2003）『映像の歴史哲学』今福隆太編，みすず書房．
- 陳奕愷（2016）『霊山勝境関渡宮――モバイルガイド』今泉百合名訳，財団法人台北市関渡宮．
- 床呂郁哉・河合香吏（2011）「なぜ「もの」の人類学なのか？」床呂郁哉・河合香吏編『ものの人類学』京都大学出版会，1-21ページ．
- ドゥ ビアシ，ピエール － マルク（2006）『紙の歴史――文明の礎の二千年』丸尾敏雄監修・山田美明訳，創元社．
- 野口鐵郎・田中文雄編（2004）『道教の神々と祭り』大修館書店．
- 日暮トモ子・石井光夫（2015）「台湾の大学入試改革と学力保証」『東北大学高度教養教育・学生支援機構紀要』vol. 1，23-35ページ．
- ベンヤミン，W.（1995）「複製技術時代の芸術作品〔第2稿〕」『ベンヤミンコレクション1　近代の意味』浅井健二郎編訳・久保哲司訳，ちくま学芸文庫，583-640ページ．
- 松本浩一（2004）「瘟神を送る祭り――王爺と王醮」野口鐵郎・田中文雄編『道教の神々と祭り』大修館書店，208-199ページ．
- 丸山宏（2004）「神々への祈願――各種の祈願とその方法」野口鐵郎・田中文雄編『道教の神々と祭り』大修館書店，220-228ページ．
- 三島憲一（2019）『ベンヤミン――破壊・収集・記憶』岩波現代文庫．
- 水谷乙吉（1943）『安南の宗教』高山書院．
- 湯浅博雄（2020）『贈与の系譜学』（講談社選書メチエ）講談社．
- 劉枝萬（1994）『台湾の道教と民間信仰』風響社．
- Son Nam (2003) *Dinh mieu va Le hoi dan gian mien Nam*, Nxb Tre.

インターネット資料

- 毎日新聞　<https://mainichi.jp/premier/politics/articles/20200106/pol/00m/010/009000c>，2020年1月7日（閲覧

日：2020年7月2日）.
- Vietnam Net <http://vietnamnet.vn/vn/doi-song/kieng-ky-thang-co-hon-chi-de-giai-quyet-van-de-tam-linh-258364.html>, 26/08/2015（閲覧日：2017年1月20日）.
- Viet Nam News <http://vietnamnews.vn/society/209150/votive-money-makers-barred-from-printing-copycat-notes.html>, 09/03/2011（閲覧日：2017年1月20日）.
- VnExpress <https://kinhdoanh.vnexpress.net/tin-tuc/doanh-nghiep/ban-vang-ma-dai-gia-yen-bai-thu-ve-hon-11-ty-dong-moi-thang-3445199.html>, 01/08/2016（閲覧日：2017年1月20日）.
- VnExpress <https://vnexpress.net/nguoi-sai-gon-cung-ong-tao-khong-ca-chep-4043121.html>, 16/01/2020（閲覧日：2020年11月10日）.